

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380884

研究課題名(和文) 自閉症児同士における「教えあい」を軸とした教育方法の開発と評価

研究課題名(英文) Mutual teaching among children with autism spectrum disorder

研究代表者

赤木 和重 (Akagi, Kazushige)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：70402675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、3つのフィールドにおいて研究を行った。1つは、小学校・特別支援学級において授業分析を行った。2つは、アメリカニューヨーク州、シラキュースにある異年齢教育を行う小中学校において参与観察を行った。3つは、わが国の保育・教育・福祉実践に焦点を当てて自閉症スペクトラム障害児の教えあいについて分析を行った。

その結果、2つのことが明らかになった。1つは、様々なフィールドにおいて自閉症児同士もしくは自閉症の子どもと他の子どもとの教えあいが見られたことである。2つは、知識を有しなくても教えあいは可能であるということである。この事実は、「教える」という行為の見方をとらえなおす重要な示唆を与える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate mutual teaching among children with autism spectrum disorder. The three studies were conducted. As a result, two findings were found. The first finding is that children with autism spectrum could show mutual teaching. If the activity had various answers, mutual teaching were often occurred. The second finding is that mutual teaching was often showed even if the children and persons with autism and other disabilities had less knowledge. These findings also suggest that the meaning and definition of teaching behavior should be reconsidered.

研究分野：教育心理学

キーワード：自閉症スペクトラム障害 教示行為 相互教示

## 1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害のある児童に対して、社会性の支援に注目が集まっている。実際、RDI、SCERTSモデル、関係発達臨床など様々な支援プログラムが開発されている。社会性の支援に注目が集まっているのは、社会性が障害特性の中核ということにとどまらず、ライフサイクルにわたって重要な鍵になるという認識が改めてなされているからである。

一方、「子ども 子ども」という関係性のなかで社会性の支援を進めるプログラムは少なかった(赤木, 2013a)。しかし、自閉症児スペクトラム障害児同士の社会的関係を支援することは、以下の2点から重要である。1つは、大人のような「足場かけ」をしない子どもを相手とするからこそ、他者の心的状態を推し量ったり、情動調整をするなどの機会が増加し、多様な社会の発達が促される可能性が高いからである。2つは、日常の仲間同士の関係を円滑にするからである。自閉症スペクトラム障害児においては、いじめに象徴されるように仲間関係のトラブルが多く報告されている。この事実を踏まえれば仲間関係から社会性の支援を進める意義は高い。

そこで、本研究課題では、「教えあい」に注目した。その理由は、以下の2つによる。1つは「教えあう」行為そのものが、友人関係を豊かにするからである。教示行為を行うためには、他者の知識や技能状態を推測するなど多様な社会的能力を必要とする(Strauss et al, 2012)。また、同時に教示を受ける側も、説明が十分とはいえない友人の発言内容を理解するなど社会的能力を必要とする。

2つは、様々な授業場面で適用可能だからである。教示行為自体は、生活単元学習のみならず系統的な教授を必要とする国語や算数においても普遍的に見られる。そう考えれば「教えあい」の教育方法は、どの授業でも、応用可能性が高いと考えられる

## 2. 研究の目的

以上の問題意識を背景に、本研究では、以下の3つを目的とした。

1つは、小学校の特別支援学級において、障害のある子どもどうしの教えあいを積極的に導入している授業を対象として、その教えあいのメカニズムを明らかにすることである。

2つは、異年齢教育を実施している小学校(アメリカ・NY州・シラキュース)に長期の参与観察を行い、そこで障害児同士および障害児と定型発達児の教えあいの実態や意味、メカニズムを明らかにすることである。

3つは、わが国の保育・教育・福祉実践に焦点を当てて自閉症スペクトラム障害児の教えあいについて分析を行った。

以上を通して、自閉症スペクトラム障害のある子どもどうしの教えあいの実態・意味・成立メカニズムを明らかにすることが本研究課題の目的である。

## 3. 研究の方法

研究1：障害児どうしの教えあいを積極的に導入している公立小学校・特別支援学級を対象に参加観察・分析を行った。在籍児童は、自閉症スペクトラム障害児やダウン症児、知的障害児など6名が在籍していた。2名の教師が授業を行った。特に、国語の授業を観察した。

研究2：アメリカ・ニューヨーク州・シラキュース地域において、小学1年生から中学3年生までの異年齢教育を実施している New School という私立学校に半年間、参与観察を行った。また教師にも適宜、インタビューを行った。自閉症児を含め複数の障害児が学校に通っていた。

研究3：複数の保育園・幼稚園・小学校で行われているいくつかの実践記録およびインタビューなどの資料を収集し、そのうえで、自閉症児の教えあいの様相について検討を行った。

## 4. 研究成果

研究1の結果：自閉症スペクトラム障害児の教えあいについて検討した。そのなかでは、自閉症スペクトラム障害のある子どもを含む障害のある子どもどうしが、国語の時間に「創作熟語」という答えが1つではない活動を実施していた。そこでは、教員が教壇に立つ時間はほとんどなく、能力差・学力差がある子どもどうしが、ほぼ均等に出題者になり、「これはどういう意味だと思いますか?」と尋ね、出題者の側にたっていた。教えあいが成立していたと考えられる。その理由は、「創作熟語」の意味を、出題者役の子どもがあらかじめわからなくても、出題することが可能になる構造を有していたからである。

なお、すでに、赤木(2013)で発表したものを、定量的に分析し、さらに詳細に再検討を行った。この成果は、2014年の World Association of Lesson Studies で発表された。

研究2の結果：New School において参与観察を行った結果、以下の3点が明らかになった。

1つは、自閉症スペクトラムの子どもも含めて、子どもの教えあい・学びあいの頻度が高かったことである。障害・年齢に関係なく教えあい、学びあいの授業が成立することが明らかになった。

2 つは、自閉症スペクトラムの子どもが、障害のない子どもに教えることや、逆の関係も見られたことである。例えば、算数的な教科においては、他の年齢よりも知識を有していることが多かったり、また、異年齢学校であるので、自分よりも5歳、6歳下の子どもには教えることができていた。

3 つは、このような子どもどうしの授業は、「コントラクト」と呼ばれる独自のカリキュラムにあることが明らかになった。学校の全生徒が、「個別学習」「ペア学習」「グループ学習」「全体学習」を組み合わせながら、そのなかで、障害のある子どもが教え手になる時間も位置づけられていた。

これらの成果は、『アメリカの教室に入ってみた：貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで』（ひとなる書房）という単著としてまとめられた。

研究3の結果：いくつかの実践記録を分析した結果、興味深い事実が明らかになった。

それは、相対的に知識量や技術が少ないものが必ずしも「教えられる」側だけにまわらないという事実である。例えば、ある知的障害者のかたは、仕事先の高齢者施設において「麻雀」をするという活動をしていた。ここでは、知的障害者のかたは、「麻雀」を教えてもらう立場であった。しかし、結果としては、高齢者は、その知的障害者の方に教えることで、自分の有する知識を活性化させ、他者にわかるように伝える能力を維持・向上させていることが明らかになった。この事例は「教えられながら教える」行為であり、1つの行為にいえば、能動と受動の両方が含意されており、そのことで、教えあいの重要な成立基盤になっていることが示唆された。

この事例のほかにも、類似したエピソードを収集しており、教えあいを成立させる意味あいは大きいものと考えられる。

この成果は、2018年8月に出る予定である単著『目からウロコ！自閉症児の発達と保育・教育』（全障研出版部）として出版される。

以上3つの研究結果をまとめると、自閉症スペクトラム障害児（やその他の障害児を含める）の教えあいについては、以下の3つの視点が重要であると示唆される。

1 つは、「教える」という教示行為の前提を問いなおすことである。一般的に、教示行為は、「知識を有するものが、知識を持たないものに、その知識を伝達する」行為としてとらえられることが多い。実際、発達研究でもこのような定義がなされている。しかし、このような全体に経つ限り、知識やコミュニケーション能力で相対的に困難さを抱える自閉症スペクトラム障害や知的障害のある子どもは、「教えられる」存在になってしまう。

しかし、研究1や研究3で紹介したように、知識が相対的に少なく、かつ、コミュニケー

ションに困難を抱える場合でも「教えられながら教える」といった特徴的な形態で教えることが可能となっていた。研究1や3の知見は「知識を有する人のみが教えることができる」という従来の特権的な定義を見直す必要があることを示唆している。

2 つは、「教える」行為の意味を、「教えられながら教える」「教えながら教えられる」というように拡張することである。通常、1つの行為には「能動」もしくは「受動」の1つの意味があてられる。しかし、研究1や3の知見からも明らかになったように、状況によっては、「教えられながら教える」行為も教える行為とみなすことができる。このように教示行為の意味を拡張させることで、自閉症スペクトラム障害児においても教えあいの行動が成立しやすくなると示唆される。

3 つは、ただし「知識や技術が相対的に少なくても教えられる。それゆえ教えあいが可能である」と主張するには、いくつかの方法論が必要だということである。

具体的には、2点の方法が重要であると示唆される。2点目は、「答えが1つではなく多様である」活動を準備することの重要性である。答えが1つの場合、どうしても知識量や技術の影響が大きくなる。しかし、研究1の「創作熟語」のように、答えが多様である場合、どのような意見であれ、「答え」として尊重される。そのことで、どの子どもも「教える」ことが可能になる。

2点目は、多様な活動と関係性を準備することの重要性である。研究2のように自閉症スペクトラム障害児を含めた異年齢学校で、「教えあい」が成立した1つの要因は、多種多様なペア、小集団、中集団、大集団という関係性のなかで、多様な活動が準備されていた。このような関係・集団が準備されているために、いずれかの活動で、障害児を含めそれぞれの子どもが有している知識や技術の「出番」が増えて教えあいが成立しやすくなったと考えられる。

逆にいえば、赤木（2017）が指摘しているように、日本の学校教育の主流である「一緒・一斉授業」の中では、障害児どうしの教えあいが成立することは困難なことが多く、現在の授業方法ではなく授業の枠組みを見直すことが必要となるだろう。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

赤木和重（2014）目からウロコ！障害児の発達を学ぶ（第7回「教える」行為は誰のもの？） みんなのねがい, 577, 14-17.

山本真帆・赤木和重（2016）個別支援を必要とする児童に対する同学級児童の意識：他者からの受容感と授業場面に着目して

神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要 10, 2, 221-230.

赤木和重 (2017) 気になる子の理解と保育：創造の保育に向けて 発達, 149, 18-23.

赤木和重 (2017) ユニバーサルデザインの授業づくり再考, 教育, 853, 73-80.

赤木和重 (2017) 「気になる子」と言わない保育・教育：素敵な実践から学ぶ 東社協保育部会「通信」 362, 5-9.

赤木和重・安藤友里・山本真帆・小淵隆司・戸田竜也 (2018) 複式学級における教育可能性の再発見：授業づくり・インクルーシブ教育・自尊感情の視点から へき地教育研究, 72, 85-94.

〔学会発表〕(計 16 件)

Akagi Kazushige (2014) Can children with autism teach each other? : From observation of the lesson in the special support class at the elementary school. World Association of Lesson Studies 2014

赤木和重 (2016) 教示行為研究から教えあうインクルーシブ教育へ (実行委員会企画シンポジウム 「特別支援教育：これまでの 10 年, これからの 10 年」話題提供) 日本発達障害学会第 51 回大会

赤木和重 (2016) 「年齢学校主義」の前提を覆すインクルーシブ教育 (ラウンドテーブル「インクルーシブ教育環境の国際比較を通じた批判的検討：米・韓の実践に着目して」話題提供) 日本教育学会第 75 回大会

赤木和重 (2016) 異年齢教育の視点からみるインクルーシブ教育：アメリカ, シラキュースにおける私立小学校の実践を通して 日本特別ニーズ教育学会第 22 回大会

山本真帆・赤木和重 (2016) 個別支援を必要とする児童に対する他児童の意識 子どもの被受容感と授業場面を視点として 日本特別ニーズ教育学会第 22 回大会

赤木和重 (2016) 日本「発」の手前で：アメリカにおけるインクルーシブ教育の実践から (研究委員会企画シンポジウム：いま, あらためて「日本発・発達心理学」の可能性を探る) 日本発達心理学会 第 28 回大会

Akagi Kazushige (2018) Improvisation comedy among persons with/without disabilities Play, Perform, Learn, Grow: Exploring Creative Community Practice 2018

〔図書〕(計 8 件)

赤木和重 (2016) 「心の理論」と教示行為：子どもを教えるのではなく子どもが教える 子安増生 (編) 『「心の理論」から学ぶ発達の基礎』(総ページ 264)(pp119-130)

赤木和重 (2016) 「心の理論」と教示行為 子安増生・郷式 徹 (編) 『心の理論：第 2 世代の研究へ』(総ページ 228)(pp105-117)

赤木和重 (2017) アメリカの教室に入ってみた：貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで ひとなる書房 (総ページ 220)

赤木和重・岡村由紀子・金子明子・馬飼野陽美 (2017) どの子にもあ～楽しかった！の毎日を：発達の視点と保育の手立てをむすぶ ひとなる書房 (総ページ 167)

赤木和重 (印刷中) 目からウロコ！自閉症スペクトラムの子ども発達と保育・教育 全障研出版部 (総ページ 144)

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

赤木 和重 (Akagi, Kazushige)  
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・  
准教授  
研究者番号：70402675